

タブ 1

本文

笛に申して、「いかに。仕ふまつるまじきか」とたびたび御けしきまめやかなれば、かくとは知らましかば、[A]、とわびしけれども、①(逃るまじき夜なれば、うひうひしげに取りなして、ことに人知らず耳慣れぬ調子一つばかりを吹きたてて止みぬるを)、上をはじめてたてまつりて、②(音に聞きつれど、いとかばかりの音とは思しめさざりつるに)、今まで聞かせたまはぬことの恨めしさをさへ仰せられて、めでたういみじと思しめされたるさま、こちたし。「またはさらにおぼえはべらず。これなむ、大臣、おのの学ばれしを聞き留めてはべりしかど、はかばかしう教へらることも候はざりしかば、③(いかにひがごと多くはべらむ)」とて、「虚言はいとうたてあり。大臣の笛の音にも似ず。世の常ならぬ音は誰伝へけむ」とあさせたまふ。過ぎぬる方、御耳慣れざりつらむ、いとうらめしきを、「今宵はなほ恨み解くばかり」とあながちなる御けしきのかたじけなさも、いとわびし。皇太后宮の姫宮など、みな上の局におはします。心にくき御辺りに何事も耳慣れられたてまつらじと思ふ方さへいとどむつかしきに、心遣ひもいとどせられたまひて、まめやかに苦し。

月もとく入りて、御前の灯籠の火ども昼のやうなるa(に)、容貌はいとど光るやうにて、柱に寄りゐて、④(わびつつ吹き出でたまへる笛の音)、雲の上まで澄みのぼるを、内、東宮をはじめたてまつりて、さぶらふ人々、すべて九重の内の人、聞き驚き、涙落とさぬはなし。五月雨の空、ものむつかしげなるに、見入れきこゆる物やあらむ、とまでゆゆしうあはれにて、誰も御覧ず。大臣見ば、ましてめづらかb(に)いまいましく思はむと、我が御心地にも劣らせたまはず、御袖もしほたるばかりc(に)なりたまひぬ。

宵過ぐるままに、笛の音いとど澄みのぼりて、雲のはたてまでもあやし、そぞろ寒く、もの悲しきに、稻妻のたびたびして、雲のたたずまひ、例ならぬを、雷の鳴るべきd(に)やと見ゆるを、星の光ども、月に異ならず輝きわたりつつ、御笛の同じ声に、さまざまの物の音ども空に聞こえて、楽の音いとおもしろし。帝、東宮をはじめたてまつりて、いかなることぞ、とあさましう思しめし、騒がせたまふに、中将の君、もの心細くなりて、いたう惜しみたまふ笛の音をやや残すことなく吹き澄まして、

稻妻の光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかけ橋

と、音のかぎり吹きたまへるは、げに、月の都の人もいかでか聞き驚かざらむ。楽の声、いとど近くなりて、紫の雲たなびくと見るに、天稚御子、角髪結ひて、言ひ知らずをかしげに香ばしき童にて、ふと降りゐたまふと見るに、糸遊のやうなる薄き衣を中将の君にうち掛けたまふと見るに、⑤(我はこの世のことともおぼえず)、めでたき御ありさまもいみじうなつかしければ、この笛を吹き、帝の御前にさし寄りて、参らせたまふ。

タブ 2

問題

問一 空欄 [A] を補うのに最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [21]

- ① 参らまし
- ② 参らざらまし
- ③ とく参らむ
- ④ とく往なむ

問二 傍線部①「うひうひしげに」の「に」と文法的に同じものを文章中の波線部a～dの中から一つ選びなさい。

解答番号 [22]

- ① a 昼のやうなるに
- ② b めづらかに
- ③ c ばかりに
- ④ d 鳴るべきにや

問三 傍線部②「音に聞きつれど」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [23]

- ① 狹衣の中将の横笛の演奏がすばらしいことは噂には聞いていたが
- ② 狹衣の中将の人柄のすばらしいことは誰でも知っているけれど
- ③ その横笛の音色は以前にも聞いたことはあったのだが
- ④ 耳慣れない短い曲のすばらしさに魅了されながらも

問四 傍線部③「いかにひがごと多くはべらむ」とは、どのようなことを言っているのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [24]

- ① 父大臣は、自分の横笛の奏法は独学によるものであったため、狭衣の中将にそれを積極的に教えようとはしなかった。その結果、狭衣の中将の横笛の演奏は悪評が多いものになったのだろうということ。

② 父大臣は、狭衣の中将の虚言をよく聞いてくれる人ではあったが、きちんと教えるということはなかった。その結果、狭衣の中将は何かと問題の多い人物になってしまったのだろうということ。

③ 狹衣の中将は、これまで独自に学んだ横笛の奏法を書き留めてきたが、父大臣にそれを見せて誤りを正すようなことはしなかった。そのため、宮中で演奏するには問題点が多いだろうということ。

④ 狹衣の中将は、父大臣が演奏なさったものをたまたま聞き覚えていただけで、きちんと教えを受けたわけではなかった。そのため、間違ったところが多いだろうということ。

問五 傍線部④「わびつつ吹き出でたまへる笛の音」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [25]

- ① 今は亡き大臣を偲びながら吹き鳴らしなさる笛の音
- ② 狹衣の中将に非礼を詫びながら吹き鳴らしなさる笛の音
- ③ 気が進まぬながら吹き鳴らしなさる笛の音
- ④ 皇太后宮の姫宮たちに気遣いをしながら吹き鳴らしなさる笛の音

問六 傍線部⑤「我はこの世のこともおぼえず」とありますが、ここにいう「我」は誰のことですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [26]

- ① 帝
- ② 狹衣の中将
- ③ 皇太后宮の姫宮
- ④ 作者

問七 この文章の内容に明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号 [27]

- ① 狹衣の中将は、客の仰せを逃れられそうもないで、横笛をいかにも初心者らしく扱って、わざわざ人の聞かないような耳慣れない曲を一曲だけ演奏し、止めてしまった。
- ② 帝は、「今夜はやはりこれまで聞かなかつた無念さを晴らすほど、たっぷり聞きたいものだ」と仰せになり、狭衣の中将に横笛の演奏をさせようとなさつた。
- ③ 月も早々に沈み、御前の灯籠の火が昼間のように明るいので、皇太后宮の姫宮のお側におはしますます光り輝くようで、狭衣の中将の横笛の音も雲の上まで響きわたつた。

- ④ 夜空の星が月と同じように明るく空一面に光り輝き、狹衣の中将の笛と同じ調子で、さまざまな楽器の音色が空から聞こえた。

問八 『狭衣物語』を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [28]

- ① 『狭衣物語』は平安時代前期に成立した歌物語の一つで、『伊勢物語』に強い影響を及ぼした作品である。
- ② 『狭衣物語』は平安時代後期に成立した作り物語の一つで、『源氏物語』の多大な影響が認められる作品である。
- ③ 『狭衣物語』は鎌倉時代前期に成立した歌物語の一つで、『大和物語』と同じく和歌に関わる物語を収めた作品である。
- ④ 『狭衣物語』は鎌倉時代後期に成立した作り物語の一つで、『竹取物語』と同じく非現実性の強い伝奇的な作品である。

タブ 3

問題と解説

問一

空欄 [A] を補うのに最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [21]

- ① 参らまし
- ② 参らざらまし
- ③ とく参らむ
- ④ とく往なむ

【解説】解答: ②

(反実仮想の基本形)

文法知識で瞬殺すべき問題だ。

- ・文脈判断: 「(帝がこんなに真剣だと)知っていたならば、[A](のに)」という後悔の文脈だ。
- ・文法構造: 「～ましかば、…まし」は反実仮想(もし～だったら、…だろうに)の定型句だ。これを見たら条件反射で「事実と反対の仮定」と判断できなければならない。
- ・選択肢の検討:
 - ・①「参上しただろうに」→ 意味が逆だ。
 - ・②「参上しなかつただろうに」→ 文脈に合う。これが正解だ。
 - ・③④「まし」を使っていない時点で論外だ。
- ・合格への鉄則: 「ましかば～まし」「ませば～まし」「せば～まし」はセットで覚えよう。

問二

傍線部①「うひうひしげに」の「に」と文法的に同じものを文章中の波線部a～dの中から一つ選びなさい。

解答番号 [22]

- ① a 昼のやうなるに
- ② b めづらかに

③ c ばかりに

④ d 鳴るべきにや

【解説】解答:②

(「に」の識別)

識別問題は品詞分解が鍵だ。傍線部①「うひうひしげに」は、形容動詞(ナリ活用)「うひうひしげなり」の連用形活用語尾である。

- a「昼のやうなるに」:「なる」は断定の助動詞「なり」の連体形(あるいは比況「やうなり」の一部) + 接続助詞「に」だ。
- b「めづらかに」:形容動詞「めづらかなり」の連用形活用語尾だ。これが正解だ。
- c「ばかりに」:副助詞「ばかり」+ 断定の助動詞「なり」の連用形(あるいは格助詞「に」)。程度を表している。
- d「鳴るべきにや」:推量の助動詞「べし」の連体形 + 格助詞(または接続助詞)「に」だ。
- 鉄則:「～げに」「～かに」「～らかに」という形を見たら、形容動詞の連用形活用語尾である可能性が極めて高い。

問三

傍線部②「音に聞きつれど」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [23]

- ① 狹衣の中将の横笛の演奏がすばらしいことは噂には聞いていたが
- ② 狹衣の中将の人柄のすばらしいことは誰でも知っているけれど
- ③ その横笛の音色は以前にも聞いたことはあったのだが
- ④ 耳慣れない短い曲のすばらしさに魅了されながらも

【解説】解答:①

(重要熟語「音に聞く」)

- **「音(おと)に聞く」**は「噂に聞く」「評判を聞く」という意味の最重要イディオムだ。これを落とすと痛い。
- 文脈は「噂には聞いていたけれど、これほど素晴らしい音色だとはお思いにならなかつた」という帝の感動を表している。

- したがって、①「噂には聞いていたが」が正解だ。

問四

傍線部③「いかにひがごと多くはべらむ」とは、どのようなことを言っているのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [24]

① 父大臣は、自分の横笛の奏法は独学によるものであったため、狭衣の中将にそれを積極的に教えようとはしなかった。その結果、狭衣の中将の横笛の演奏は悪評が多いものになったのだろうということ。

② 父大臣は、狭衣の中将の虚言をよく聞いてくれる人ではあったが、きちんと教えを授けるということはなかった。その結果、狭衣の中将は何かと問題の多い人物になってしまったのだろうということ。

③ 狹衣の中将は、これまで独自に学んだ横笛の奏法を書き留めてきたが、父大臣にそれを見せて誤りを正すようなことはしなかった。そのため、宮中で演奏するには問題点が多いだろうということ。

④ 狹衣の中将は、父大臣が演奏なさったものをたまたま聞き覚えていただけで、きちんと教えを受けたわけではなかった。そのため、間違ったところが多いだろうということ。

【解説】解答:④

(謙譲の文脈把握と語彙)

狭衣(中将)が帝に対して謙遜して言っているセリフ。

・直訳:「(父大臣が演奏するのを)聞き留めておりましたが、きちんとお教えいただくこともございませんでしたので、どれほど間違いが多うございましょうか」。

・語彙:「ひがごと(僻事)」=「間違い、誤り」は古文単語帳の基本語だ。

・選択肢の検討:

・①「悪評が多い」→ 書いていない。

・②「虚言」「問題の多い人物」→ 文脈が違う。

・③「書き留めてきた」→ 「聞き留めて」とあるので不適だ。

・④「間違いが多いだろう」→ 正解。

問五

傍線部④「わびつつ吹き出でたまへる笛の音」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [25]

- ① 今は亡き大臣を偲びながら吹き鳴らしなさる笛の音
- ② 狹衣の中将に非礼を詫びながら吹き鳴らしなさる笛の音
- ③ 気が進まぬながらも吹き鳴らしなさる笛の音
- ④ 皇太后宮の姫宮たちに気遣いをしながら吹き鳴らしなさる笛の音

【解説】解答:③

(重要単語「わぶ」)

- ・「わぶ(侘ぶ)」は「気落ちする」「やりきれなく思う」「つらく思う」という意味だ。現代語の「お詫びする(謝罪)」とは意味が異なるので注意が必要。
- ・ここでは、帝にしつこく所望されて断りきれず、「困ったなあ、気が進まないなあ」と思いながら吹き始めている場面。
- ・①「偲びながら」→ 違う
- ・②「非礼を詫び」→ 引っかけ
- ・③「気が進まぬながらも」→ 正解

問六

傍線部⑤「我はこの世のこともおぼえず」とありますが、ここにいう「我」は誰のことですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [26]

- ① 帝
- ② 狹衣の中将
- ③ 皇太后宮の姫宮
- ④ 作者

【解説】解答:②

(主語判定と視点の転換)

物語文の難所。

- 文構造: 「(天稚御子が)…中将の君(狭衣)に(衣を)掛けたまふと見るに、(私は)この世のこととも思えず…」
- 一見、「見るに」の主体である帝かとも思えるが、この「我」は、天女のような童(天稚御子)に衣をかけられ、神がかった演奏をしてトランス状態に入っている狭衣(中将の君)自身の内心とるのが物語の定石だ。
- また、直後の「この笛を吹き、…参らせたまふ(謙譲語)」の動作主も狭衣であるため、主語は一貫して狭衣(②)となる。
- 鉄則: 中堅大以上の入試古文では、「超常現象発生時の恍惚状態=主人公」というパターンが多い。

問七

この文章の内容に明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号 [27]

- ① 狹衣の中将は、客の仰せを逃れられそうもないで、横笛をいかにも初心者らしく扱って、わざわざ人の聞かないような耳慣れなき曲を一曲だけ演奏し、止めてしまった。
- ② 帝は、「今夜はやはりこれまで聞かなかつた無念さを晴らすほど、たっぷり聞きたいものだ」と仰せになり、狭衣の中将に横笛の演奏をさせようとなさつた。
- ③ 月も早々に沈み、御前の灯籠の火が昼間のように明るいので、皇太后宮の姫宮のお側におはしますます光り輝くようで、狭衣の中将の横笛の音も雲の上まで響きわたつた。
- ④ 夜空の星が月と同じように明るく空一面に光り輝き、狭衣の中将の笛と同じ調子で、さまざまな楽器の音色が空から聞こえた。

【解説】解答: ③

(内容一致・細部照合)

明らかに間違ひを探す消去法が有効。

- ① ○。「うひうひしげに(初心者のように)」「耳慣れぬ調子一つばかり」と合致する。
- ② ○。「恨み解くばかり(今まで聞けなかつた恨みを晴らすほど)」と合致する。
- ③ ✗。ここが間違ひ。

- ・本文:「皇太后宮の姫宮など、みな上の局におはします」「(狭衣は)柱に寄りみて」
- ・選択肢:「皇太后宮の姫宮のお側におはします」
- ・解説: 狹衣は局(部屋)の外の柱に寄りかかっているのであって、姫宮の「お側(すぐ近く)」にいるわけではない。平安時代の男女が公衆の面前でそんなに接近するのは「古文常識」としてあり得ない!
- ・④ ○。「星の光…月に異ならず」「さまざまの物の音」と合致する。

問八

『狭衣物語』を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [28]

- ① 『狭衣物語』は平安時代前期に成立した歌物語の一つで、『伊勢物語』に強い影響を及ぼした作品である。
- ② 『狭衣物語』は平安時代後期に成立した作り物語の一つで、『源氏物語』の多大な影響が認められる作品である。
- ③ 『狭衣物語』は鎌倉時代前期に成立した歌物語の一つで、『大和物語』と同じく和歌に関わる物語を収めた作品である。
- ④ 『狭衣物語』は鎌倉時代後期に成立した作り物語の一つで、『竹取物語』と同じく非現実性の強い伝奇的な作品である。

【解説】解答: ②

(文学史)

- ・作品:『狭衣物語』
- ・成立: 平安時代後期。
- ・ジャンル: 作り物語。
- ・特徴:『源氏物語』の影響を強く受けている(『源氏亜流物語』の代表作)。
- ・よって②が正解。
- ・※①は『伊勢物語』等の説明。③は時代やジャンルが違う。④は鎌倉時代ではない。

タブ 4

全文和訳

(帝が)笛について所望なさって、「どうだ。(私に笛を)奏上してくれないか」と、度々ご様子が真剣なので、(狭衣の中将は)これほど(真剣)だとは知っていたならば、参上しなかつただろうに、とやりきれなく思ったけれども、

(帝の命令から)逃げられそうにない夜なので、いかにも初心者のように振る舞って、特に人が知らず耳慣れない調子(の曲)を一曲だけ吹き立ててやめてしまったのを、

帝をはじめ申し上げて、その場にいる人々は皆、噂には聞いていたが、これほど(素晴らしい)音色だとはお思いにならなかつたのに、(帝は)今まで聞かせてくださらなかつたことの恨めしさまで仰って、素晴らしい、並々でないとお思いになつてゐる様子は、仰々しいほどである。

(狭衣は)「他には全く覚えておりません。これ(今吹いた曲)は、父大臣が、それぞれ学ばれたのを聞き覚えておりましたが、きちんとお教えいただくこともございませんでしたので、どんなに間違いが多くございますことでしょう」と言って(謙遜すると)、

(帝は)「嘘(謙遜)もあまりにひどい。大臣の笛の音にも似ていない。この世のものとは思えない音色は誰が伝えたのだろう」と驚き呆れなさる。

(さらに帝は)「過ぎ去つた時、(私に笛を)お聞かせしなかつた(ので私の耳が慣れていない)だらうことが、とても恨めしいのを、『今夜はやはりその恨みを解くほど(たっぷりと聞きたい)』」と強引におっしゃるご様子の恐れ多さも、(狭衣にとっては)とてもやりきれない。

皇太后宮の姫宮などが、みな上の局にいらっしゃる。(その)奥ゆかしい御あたりに、何事も耳慣れさせ申し上げまい(=私の笛を聞かせたくない)と思う方さえいよいよ厄介(で気が引ける)な上に、(帝が姫宮たちに聞かせようと)お心遣いもいっそうされなさって、本当に心苦しい。

月も早く沈んで、御前の灯籠の火などが星のように明るいので、(狭衣の)容貌はいよいよ光り輝くようで、柱に寄りかかって座り、困りながら吹き出しなさつた笛の音は、雲の上まで澄み上るのを、

帝、東宮をはじめ申し上げて、お仕えする人々、すべて宮中のは、聞いて驚き、涙を落とさない者はいない。

五月雨(の季節)の空が、なんとなくうつとうしい様子であるのに、(空から)じつと見守り申し上げる物があるのだろうか、(と思わせる)まで不吉なほど感動的で、誰もが御覧になる。父大臣が見たら、まして格別に不吉(なほど素晴らしい)と思うだろうと、(狭衣は)ご自身の心地にも劣りなさらず、お袖も涙で濡れるほどになりなさつた。

宵が過ぎるにつれて、笛の音はいよいよ澄みのぼつて、雲の果てまでも不思議に、なんとなく寒く、もの悲しいのに、稻妻が度々光つて、雲の様子が並々でないのを、雷が鳴るのだろうかと見えるのを、星の光などが、月と変わらず(明るく)一面に輝きながら、笛と同じ音律で、さまざま(天上の)楽器の音色が空に聞こえて、音楽の音はとても素晴らしい。

帝、東宮をはじめ申し上げて、どういうことか、と驚き呆れなさつて、騒ぎなさる時に、中将の君(狭衣)は、なんとなく心細くなつて、ひどく惜しみ(大切にし)なさる笛の音を、少しも残すことなく吹き澄まして、

(歌)稻妻の光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかけ橋

(訳:稻妻の光に乗って行ってしまおう。天まで遙かに渡してくれ、雲の梯子を。)

と、声の限りに吹きなさっているのは、本当に、月の都(天上界)の人もどうして聞いて驚かないだろうか(いや、驚く)。

音楽の声が、いよいよ近くなつて、紫の雲がたなびくと見ると、天稚御子(あめわかみこ=天童)が、角髪(みずら)を結つて、言葉では言い表せないほど可愛らしく芳しい童の姿で、ふと降りてお座りになったと(狭衣が)見ると、かけろうのような薄い衣を中将の君(狭衣)に掛けなさつたと見ると、我ながらこの世のこととも思われず、素晴らしい(天稚御子の)ご様子もたいそう慕わしいので、この笛を吹き、帝の御前に近寄つて、(笛を)差し上げなさる。